

# カルシュの研究

若松秀俊

大正の終わりに、火山の噴火のように突然日本という  
地上に現れた 燃えさかる熱い石だったカルシュ先生



フリッツ・カルシュ博士  
(1893-1971)

熱い石は周囲に衝撃的に大きな影響を与えてくれたのに、時とともに冷えて、いまでは誰からも忘れられてしまっている。

たまたま通りかかったひとりがそれを見つけた。手にとって丁寧に汚れを払いのけ、昔の姿を偲んでいる。

冷えてできた軽石は素朴な姿で、もはや何の特徴もないように見える。

でも今、この手でそれをそっと暖めると小さな穴に残った香りを取り囲む空気が膨らんで外に漏れ出てくる。

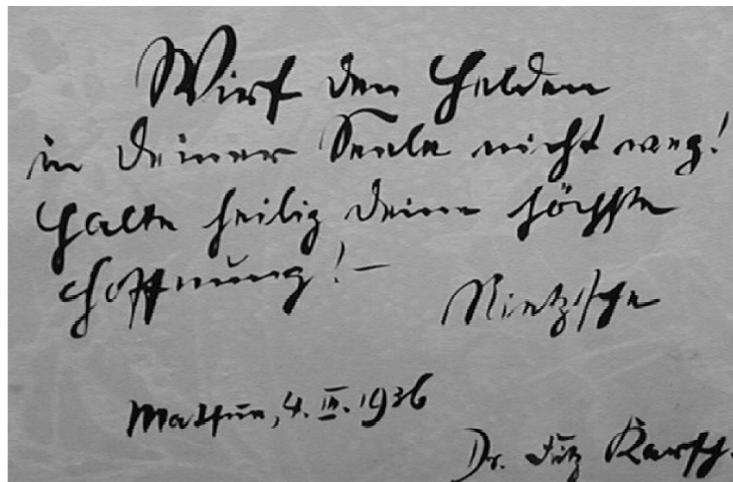
すると、当時の情景が眼前に蘇って来る・・・「湖畔の夕映」より

## 日本の若者に贈った言葉 「四ツ手網の記憶」より

*Wirf den Helden in deiner Seele nicht weg!  
Halt heilig deine höchste Hoffnung!— Nietzsche  
Matsue, 4. III. 1936 Dr. Fritz Karsch.*

《氣高き大望》を汝の胸に抱き続けよ

若松秀俊 訳



汝の心から《英雄の氣》を失うことなかれ

## ★カルシュを知ったきっかけ

1999 年の 8 月から 9 月にかけて、ドイツのカールスルーエで行われたヨーロッパ自動制御学会で大会長の P. フランク教授の推薦を受けて、実行委員として参加しました。会議終了後の 9 月 4 日 高原健爾博士らと、シュトゥットガルトに足を踏み入れました。金銭に余裕のない一行は駅の Information で受けた紹介から無意識に安価なホテルを選択しました。これが、運命のホテルでした。翌日の朝ダイニングルームで、我々に微笑みかけた婦人との会話から彼女の父が旧制松江高校のドイツ語の教師であったことを知りました。軽い会話の後に彼女の住所の書付を手にして、その場を去りました。たった、5 分程の会話でした。これが、すべてのストーリーの始まりでした。

## ★カルシュの紹介

カルシュ博士は大正 14 年より 14 年間にわたり、旧制松江高等学校（現・島根大学）で教育に力を注いだドイツ人哲学者です。彼は、日本の哲学や宗教の研究家で教育者であり、昭和 15 年から 5 年間は外交官でもありました。彼の薫陶を受けた著名人には「長崎の鐘」で知られる永井隆、免疫学者の奥野良臣をはじめとする科学者、著名な政治家の赤澤正道、福永健司、細田吉蔵、それに文学者、法律家、外交官など枚挙に暇がありません。当時の朝鮮、台湾からの学生で、戦後に故国の復興などに尽力した有能な医師、技術者なども挙げることができます。ラフカディオ・ハーンと並ぶ功績を残した同博士は、数多くの優れた風景パステル画、歴史的写真、それに専門著書、関連図書と膨大な未整理の研究成果を残しています。



旧制松江高等学校正門



旧大橋にたたずむ高校生

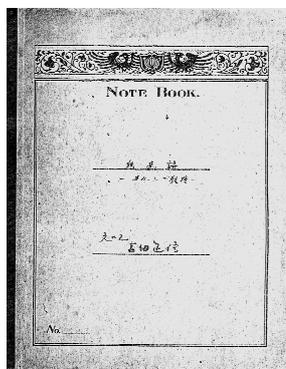


カルシュの個人指導の様子

戦中・戦後の混乱により歴史の狭間に埋もれた、偉大なカルシュ博士の足跡が広く国民に知られることを心から念じ、2000 年以來、日本国内、ドイツおよび米国で蒐集した関連資料の永久保存の呼びかけを行ってきました。

## ★カルシュの生徒への講義

カルシュは生徒の要請でゲーテの詩、ヨーロッパの社会、自らの宗教観を語りました。



九期文乙生 宮田正信  
が残した講義録



カルシュ自身の主義・主張とは異なる  
マルクスの理論について講義を行った。  
昭和 5 年 9 期文乙生教室での講義

## カルシュ博士の講義内容から

ハルトマンの指導下で学位取得し、さらにシュタイナーの影響を受けたカルシュは後に、『ヨーロッパ文明の没落』の著書で有名なシュペンクラーと同様に、根本精神の欠落している性急な歩みに対する批判だけでなく、人間性を肯定する可能性として『仮象』の世界を描き、さらに『仮象』の社会を実現し、そこで生きることを目指すことの重要性を当時の生徒達に語っている。

唯物主義に走り過ぎた病態にある文明に支えられているヨーロッパ諸国に文化の崩壊の時が来る。それも西暦二〇〇〇年頃といっている。この時期に全世界の人々の間に混乱が起り、大きな危機に直面するという。驚くべきことに、これが、当時の講義の中で高校生に語られている。ヨーロッパは物質文明の発達により、その精神が物質的成果のみの社会に閉じこめられていることと、そうした中で、社会も個人も自らを支える精神的根拠が希薄であって、不安定な状況に晒されていることをその理由に挙げている。

なお、『同質と異質』の『混在と調和』で特徴づけられる日本の文化の一面と、他の地域からの思想や文物を巧みに吸収してこれを融合する力を大きな特徴として指摘している。そして、一つのものが他を滅亡させることなく共存している日本の文化の在りようは世界中の識者の注目するところであると語っていたという。まさに、今日の世の有様を年代を含めて的確に予測していた。このことは混乱の時代に生きる我々にとって実に驚くべき洞察力であり、これらの講義内容を五期理乙の酒井勝郎が記録にとどめている。また、日本を離れるに際して、カルシュが生徒に語ったことをドイツ語の文章で印刷物として自ら残しているのは確かな証拠として極めて興味深い。

若松秀俊著「四ツ手網の記憶」より

## ★カルシュの調査

調査をもとにして得られた、膨大な資料と写真から彼の当時の生活や生徒との交流をほぼ再現できました。しかし、調査を始めて間もない頃に協力してくれた同博士の愛弟子は殆どがすでに他界し

てしまいました。彼らの残してくれた言葉や手紙を時に想い出す今日この頃です。ドイツの文化と風土に、若き日に触れる機会をドイツ政府から与えられた者がドイツの小さなホテルでカルシュ博士の次女フリーデルンに偶然に出会って、このような仕事に携わることになったのは、小生に与えられた天命と考えています。

### ★カルシュと生徒の間のエピソード

数多くのエピソードのうち、隣家が火事に会った時に、信じられないような日本人の行動に胸打たれた、当時 9 歳の長女メヒテルトは、終生日本人とはこういう人たちだと思いこみ、その行動を今も自分の子や孫、そして近隣で語っているとのこと。



カルシュが大正 14 年から昭和 14 年まで住んだ官舎

- 《軽石》
- 《官舎の火事騒ぎ》
- 《カルシュ先生と一緒に》
- 《学園祭の模擬店》
- 《マルクスの逸話》
- 《雨の夜のできごと》
- 《広島にて》
- 《ニーチェの解説書》
- 《先生と生徒の情熱》
- 《来客》



### 官舎の火事騒ぎ

若松秀俊著「四ツ手綱の記憶」より

### ★カルシュに関するアルバム

#### ○寮生の生活

寮や寮生がどのような生活をしていたか、その概要はあまりにも学寮での我々の体験に類似していました。



自習寮と呼ばれた学寮玄関前での生徒達



自習寮での生活の様子

当時、活見と呼ばれた映画鑑賞

## ○カルシュの遺品

カルシュの残した膨大な哲学の未発表原稿、写真、絵画、調度品などを広く世に公開できるものと期待しています。というのも彼の残した足跡が広く全国的に確認できるからです。

## ○カルシュの私生活

カルシュは周囲の人たちとともに自ら描いた約 90 枚のパステル画、水彩画を残しています。



カルシュ自筆 中海の向こうに見える大山 静物画

カルシュは近所の子供たちとの付き合いをも大事にして、多くの日本人形を買い揃えました。偉人に関する逸話、神話、それに絵本（講談社）を全巻揃えました。これらはアメリカの長女メヒテルト宅に現存しています。



戦前の講談社による絵本全巻 カルシュが子供達に与えた玩具 戦前の日本に関するカルシュの講演の録音

★これまでに、NHK 松江、松江歴史資料館、島根大学、軽井沢歴史民俗資料館、米子コンベンションセンターなどで写真展示会を開催しています。

★ドイツの人々のために書いた下記の書籍(2016年3月出版)についてベルリンの日本学の先生からお褒めの言葉をいただきました。

Erinnerungen aus dem Viereckigen Tauchnetz—*Japanische Schönheit, gesehen durch blaue Augen*  
今後、引き続き ドイツでの協力者と共に新たな形式で出版することと 1,500 枚に及ぶ各地での写真展を希望しています。

★最近の地元のメディアで取り上げられている様子に、カルシュ紹介番組で中国地区番組の優秀賞を受賞しました。